

風景構成法における描画空間構成プロセスに関する研究

大場, 麗

<https://hdl.handle.net/2324/4059968>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (心理学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 大場 麗

論 文 名 : 風景構成法における描画空間構成プロセスに関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、心理療法で用いられる描画法の一つである風景構成法についてその描画空間構成プロセスを記述することで、プロセスの中でどのようなことが生じ、その現象をいかに解釈することができるかということを探索的に検討して仮説の生成を試みたものである。

風景構成法はその施行自体が心理療法的に機能したりクライアントの理解へと繋がる心理技法の一つであるが、その活用は個々の心理臨床家の力量によるところが大きいという現状である。特に本論文で取り上げる「描画空間構成」については、創案時より臨床事例における描き手の示す構成の型への着目がなされてきたが、一般的な理論的仮説の蓄積は十分とは言えない状況であり、調査研究の枠組の中で検討を行なっていく必要があると考えられる。

そこで本論文ではまず風景構成法の成立の経緯からその後の風景構成法研究の展開までを概観することで、このテーマを取り上げる意義と現時点で残されている課題について検討し、その中で構成プロセスに着目する有効性を論じた。そして多角的な観点から風景構成法の描画空間構成プロセスを記述すること、記述された構成プロセスから描画空間構成に関する仮説を生成することを行なった。

第1章ではまず創案者の中井久夫の研究を辿り、統合失調症患者の体験構造の様式が風景構成法の描画空間構成に反映されることが示されたことから、一般に人の体験様式が風景構成法の描画空間構成にいかに関与されるのかという問題が提示された。この観点から先行研究を概観したところ、精神病理や発達の影響下での知見は蓄積されている一方で、一般成人については理論的仮説が十分に提示されていないことが示され、この検討には構成プロセスへの着目が有効であると考えられた。

第2章では構成プロセスを記述する方法とそこから仮説を生成する方法について検討された。構成プロセスは、風景構成法の施行場面を録画したデータから、線描段階については描画空間の構成要素ごとに時系列にそって記述する方法が、彩色段階については線描段階で構成された絵に対する色の選択様式を記述する方法が作成された。仮説生成は、記述されたプロセスにみられる描き手を通じた共通性に着目することで描画空間構成の文法を探索的に検討する方法が用いられた。

第3章から第5章では風景構成法の線描段階における構成プロセスが検討され、第3章では風景構成法の各アイテムの描画時間の展開、第4章では描画空間の「図と地」の分化プロセス、第5章では描画空間におけるアイテムの配置プロセスについて検討された。第3章では、風景構成法の各アイテムの描画時間を分析したところ各アイテムの特徴が見出され、そのアイテムの特徴を時系列にそって捉えた場合に見えてくる構成プロセスの意味について仮説が生成された。

第4章では風景構成法の各アイテムの占有率を算出することで描画空間の「図と地」の分化プロセスを記述し、「図と地」の比率の変動や相関関係の見られるアイテムの組み合わせが見出され、構成プロセス中でその結果が生じる理由について仮説が生成された。

第5章では描画空間における各アイテムの配置プロセスについて検討し、本論文では4通りの配置プロセスが見出された。そしてこの4通りについて、それぞれにその配置プロセスを辿る論理について説明仮説が立てられた。

第6章と第7章では、風景構成法の線描段階後に行われる彩色段階について、描画空間構成の観点から一連のプロセスとして捉えその様相の記述を行なった。つまり、線描段階に連なるプロセスとして彩色段階を経た後に最終的にどのような描画空間構成となるのかについて検討された。第6章では、「図」(アイテム)と「地」(余白)の要素別の使用色の選択傾向について分析し、大景群・余白部と、中景群・近景群・付加物の2グループに使用色の傾向が分けられたことから、線描段階での「図と地」の構造が彩色段階で変容するプロセスが示された。特に大景群は「地」の要素に接近することで「前対象化」の過程と捉えられた。

第7章では、風景構成法の彩色過程における重色の様相を記述することで、最終的な描画空間構成への影響やその意味について検討された。その結果、テクスチャやグラデーションなどの3次元性を付与するものの他にも、描画空間に時間性という4次元性を付与する重色も見られ、これらの重色について施す際に生じる意味についても検討された。そして重色の中には「基底色+ α 」という構造で説明できるものも示され、この重色については臨床事例への転用可能性についても示唆された。

終章では、各章を統合して風景構成法の描画空間構成プロセスを論じ、生成された仮説についてまとめられた。風景構成法の描画空間構成プロセスでは、アイテムの順序性によって表現が制限される一方で、いくつかの現象については後のアイテムや彩色によって補完される仕組みが備わっており、これらのプロセスについて心理療法的な意義を示唆するものとして捉えられた。今後の課題としては、描き手の個人差の検討や描き手と見守り手の相互作用の影響の検討、仮説の検証を行うことなどが挙げられた。